

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年6月3日(木)

### 《神様の愛》

今日の福音(マルコ 12・28b 34)を読む時には、いつも自然に頭が下がります。

皆様は、どのような気持ちでこの箇所を読まれているのでしょうか。私はこの箇所を読むと、「本物の司祭なのか」と思うくらい特に辛いところが見つかります。

私たちはこの福音を読むときに、まず自分の弱さを認めながら、イエス様のこの教えにどのくらい近づいているか、この言葉をどのような意味で受け取っているか、そしてどのようにその言葉を実践しているか、振り返ってみる必要があると思います。そのような振り返りが日々繰り返すと、やはり何年前より今のほうが少しでも進歩しているのではないかと思えます。私もその進歩によって自分で自分を慰めています。

私たちが自分を成熟させるためには、人のことよりもまず自分のことを、その心の中まで入って、客観的な目で見つめるのが、一番正しい方法ではないかと思えます。

15、16年前になります。私は、1ヶ月後に叙階される韓国の南の方の助祭たちに黙想指導をしたことがありました。その黙想の最後の日に、このような話をしました。

「あなた方は今、司祭になることに対して、いろいろな悩みや不安があると思います。逆に、いろいろな希望も持っているでしょう。先輩として、あなた方に言いたいことが一つだけあります。それは、普通の人より少しだけ親切になってほしい、ということです。少しだけ親切になれば、みんながあなた方を愛するようになると思います。」

しかし、この少しだけの親切が出来ないのです。特に司祭たちには難しいです。何の権威か、何の理由か分からないのですが、首に力が入ってしまい、司祭たちと話そうとすると、人々はいつも見下ろされるような感じを受けるのだと思います。結局、いつも愛を叫んでいるのにもかかわらず、愛と反対の道を歩んでしまう誘惑が一番多いのが司祭ではないかと反省しています。

とにかく、初めて叙階された時には純真な心で、たくさんの熱心な心を持って、一生懸命に頑張ります。しかし時間が経てば経つほど、慣れてしまいます。その原因は、祈りが途切れることです。いつもそういう経験をします。自分がなぜこのようにふさわしくない顔を信者の方に見せているのか、反省してみると、それはいつも祈りが途切れた時でした。ですから司祭は、死ぬときまで祈りと共にイエス様のみ言葉を意識しなければならないのでしょうか。そうでなければ、その存在の理由を忘れてしまうのが司祭たちではないかと思えます。

この頃、黙想のために本を読んでいるのですが、今日、その本の中に心を打つ文章が見つかったので、急いで訳してみました。

## 神様の愛

神様は愛であり、その愛は永遠です。神様はご自分の愛を分けてあげようと人間を創造されました。愛は、理念、思想、幻想ではなくて、常に具体的な現実です。神様はいつも現在におられ、人間の現実的な条件の中に入られ、私たちを愛によってかばってください、ご自分の永遠な命に与らせます。

私たちは、主の愛を分けていただいた人々です。ですから、主が私たちを理解してくださったように、そしてあらゆる難しさについて聞いてくださったように、私たちも隣人を大事にし、配慮しなくてはなりません。

愛は固定した枠ではありません。愛はダイナミックで積極的です。愛はただ施すことであり、返してもらわなくても喜ぶ心です。ですから、愛は全てのものから自由にし、そして豊かにさせます。私たちが創られた神様が愛であり、自由な方だからです。

ありがとうございました。